

2021年度漢文夏期集中コース報告

大 竹 弘 子

1 はじめに

アメリカ・カナダ大学連合日本研究センターでは、40週間の年間コースとは独立して漢文夏期集中コース（以下漢文コース）を設置しており、2021年6月23日（金）より8月4日（水）まで実施した。

漢文は年間コースでも、プログラム後期において「選択C」として週1回の授業を実施している。しかし、年間プログラムには参加できないが、研究上、漢文読解を必要としている大学院生、研究者等が想定されることから、日本人が書いた漢文を中心に、漢文の基本構造習得・読解に集中したコースを設けている。

今年度はZoomによる授業のオンライン化に伴い、期間・授業時間・授業内容など、例年とは異なるプログラムでの実施となった。（例年の漢文コース内容については[大竹\(2019\)](#)を参照）

2 漢文コースの目的と特徴

このコースは、対象として、主に資料として漢文を読むことが必要な歴史学、文学、人類学、宗教研究、美術史等の分野の大学院生、研究者を想定している。漢文読解の必要はあっても、漢文基礎の学習機会が少ないことから、基礎となる構文、旧漢字、漢文訓読体、候文などを集中的に学習し、その構造知識をもとに実際の文章を読み、和製漢文の文体・特徴に慣れ、以後の研究に資することを目的としている。

受講者には次の要件を満たすよう求めている。

1. 漢文読解能力を必要とする専門的または学術的分野への従事を目指していること
2. 上級レベルの日本語能力、および文語文法の知識を有すること
3. 日本語の基礎的文法・文型を十分に理解し、ひらがな、カタカナに加え、漢字約1000字以上の読み書きを既に習得していること

3 受講生の構成

今年度は博士課程に在籍する六名の大学院生が受講した。専門分野は中世仏教、中世仏教美術、中世宗教、近世・近代政治思想、近代文学、近代ジェンダー史で、研究において、漢文あるいは漢文調で書かれた資料の読解・理解を必要としている。研究対象、及び、読

むべき資料はある程度固まっていたが、漢文の知識については、すでにかかなりの知識を有する受講生・基礎知識を有する受講生、ほぼ知識のない受講生など様々な段階にあった。

4 教育活動の詳細

4-1 今年度の期間・授業時間

オンライン化に伴い、問題となるのは教育の質の確保が十分できるかということと、講師と受講者の時差だが、教育の質については、年間コースでのオンライン授業実施の経験から、例年の枠組みを元にいくつかの工夫を講じることとした。時差については、例年の一日四コマの授業は受講者の負担を考慮するとできないという判断の下、コンタクトアワーの確保のため、授業を一日二コマ、期間を例年より長い六週間弱とし、構文の授業を月・水・金、読解の授業を火・木に実施することとした。また、受講者同士の交流のため、夏期コースと共通で Remo にて談話室を設け、Zoom にてレクチャーシリーズを開催した。Remo の自由会話の場とレクチャーシリーズは自由参加である。

4-2 授業の枠組みの工夫

4-2-1

「自習室」という時間を午前 8:30 から 25 分間設け「クイズ・情報検索・前の授業で与えられた課題の確認」をすることとした。「課題の確認等」は例年授業時間内に行っていたが、オンライン授業では時間が不足することが予測されたので、このような時間を設けたものである。しかし、「自習」としつつも、受講者同士の自律的活動は期待したほど成立せず、講師側の介入がかなり必要であった。オンライン環境では受講者が顔を合わせるできないのでコミュニケーションを取ることが難しかったのであろう。

「自習室」後、午前 9 時 00 分から午前 10 時 50 分までの二コマを授業時間とした。

4-2-2

年間コースでのオンライン漢文授業の経験から、「辞書、特に漢字の辞書、に関する指導」の必要性が分かっていたので、二回の辞書オリエンテーションを設けた。受講生がアクセスできる辞書は形式・用語など様々で、それぞれの辞書から得られる情報を整理し用語に慣れるためである。

- ① 漢字の基本情報にはどのようなものが提示されているか
- ② 字義はどのような階層性をもって並べられているか
- ③ 助字・句法・語法・日本語固有の使用法について、どこにどのような項目として提示されているか

以上の点を中心に、全員で同じ漢字を調べながら自分の辞書はどのような形になっているのかを確認させた。

4-2-3

Google ドライブによる教材シェアを行ったが、受講生間の知識の差を配慮して 構文では、構造を説明する例文は返り点・送り仮名付きで提示し、練習文は、返り点・送り仮名を付けたものと白文、徐々に返り点のみ付したものと白文を織り交ぜて提示した。どの形を選ぶかは受講生の判断とした。読解では課題以外の文章、参考資料を加えるなどした。また、例年よりもモデル書き下し文・現代語訳を多く提示した。

4-2-4

受講生に読解・解釈のプロセスを示すため、共有画面に書き込めるアプリケーション・機器を用い、目に見える形で道筋を示した。具体的には、Kami for Google Chrome・iPad を用い、どちらも PDF 文書を共有しながら講師側が必要に応じて手書きで書き込んでいった。

4-2-5

受講生の構文・読解のプロセスをドキュメントの形で講師が共有し、誤りを指摘していく。受講生は指摘を見て訂正した。具体的には、受講生一人一人が自分のドキュメントファイルを講師と共有し読み下しなどを書き込む、講師は受講生の書き込んでいく内容を順に見ながら訂正すべき部分を赤字などで指摘する、受講生は指摘された誤りを自分で訂正してみるという流れである。

4-2-6

コースの最後には例年と同じく、一次史料読解の経験として、受講生の選んだ研究資料から一部分を選び全員で読解を試みた。取り上げたのは、『古事記』より「黄泉国」、藤原宗忠『中右記』より「天永三年六月十七日」、明恵『摧邪輪莊嚴記』抜粋、会沢正志斎『新論』抜粋、福沢諭吉『肉食妻帯論』、清水紫琴『一青年異様の述懐』である。

5 受講生のオンラインコースに対する評価

コース終了時に受講生に対し Google form によるアンケートを行い、六名中五名から回答を得た。コース全体への評価は excellent 100%と高評価であったが、教材の内容・量への評価は一名が fair とした。授業全体に対する評価が excellent 100%であったところを見ると、既習の受講者にとっては教材に物足りない部分があったものと推測される。また、

談話室・レクチャーシリーズについては時差による負担の大きさを挙げ、参加しなかった受講生が大部分だった。評価された工夫としては、共有画面への書き込み、ドキュメント共有による指摘などが挙げられた。

6 講師の感じたオンラインコースの問題点

講師の感じた問題点の大きなものとして、受講生を個人個人として捉えるのが難しく、それぞれの弱点に対する働きかけがしにくいこと、ドキュメントの共有によって、誤りは指摘できるが、誤りに至るプロセス、例えば、課題文をどう分節化しているのか、辞書をどう利用しているのか、が可視化されず、そこに対する指導が難しいこと、受講者同士が交流しにくく、自分の持っている知識・リソースを共有できず、広がりや得にくいことが挙げられる。また、対面授業では可能であった、「受講生の知識・理解に応じて、個別の課題を与え、個別に指導する」ことが Zoom 環境では時間的・手段的に十分な余裕が持てず、それが教材に対する fair という評価に繋がったのではないかと推測される。

7 おわりに

今年度は漢文コースとしては初めてのオンライン授業であり、事前の準備・コース開始後の受講生への対応など手探りの部分がかなりあった。幸い、受講生の意欲が高く、あまり十分とはいえない指導環境でも熱心に課題に取り組んでくれた。

アンケートの評価は高かったものの、講師側には十分な対応ができていたのかどうかというもどかしさが残る。特に受講生間の漢文構造・語彙表現・背景知識の差に応じた対応が十分であったとは言いがたい。今後は今年度得た経験をもとに、オンライン環境下でどのような改善が図れるか、教材・アプリケーション・機器などについて検討していきたい。

(おおたけ ひろこ／2021 年度漢文夏期集中コース主任)

参考文献

- 大竹弘子 (2019) 「2019 年度漢文夏期集中コース報告」 『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター教育研究年報』 第 8 号 pp.186-189
 <https://www.iucjapan.org/pdf/nenpou2019_Otake.pdf>